

『ダ・ヴィンチ・コード』の暗号
— 『ダ・ヴィンチ・コード』が提起した諸問題 —

Codes of *The Da Vinci Code*
— Problems brought about by *The Da Vinci Code* —

林 正 雄
Masao HAYASHI

(平成 17 年 9 月 30 日受理)

はじめに

2003 年の夏 *New York Times* のベストセラー一位にランキングされた『ダ・ヴィンチ・コード』はその後も出版部数を増やしつづけて、2005 年の夏に、全世界での発行部数が 3600 万部となったと言う。

この小説の面白さは、小説のプロット展開のなかに作者のキリスト教に対する見解が織り交ぜられている点に求められる。歴史、文学、神学および文化史について興味深い問題が提起されている。一般の学生があまり関心を示さない西洋の宗教史、特にキリスト教史についての分かりやすい導入手段として読むことができる。正統的なキリスト教が成立するまでの歴史的過程のかなで、異端として排除されたさまざまな思考形態を再評価しようとしている。

ただし、キリスト教に対してフェミニズムの立場から、かなり批判的な視点が盛り込まれており、作中人物に語らせる作者のキリスト教批判を鵜呑みにするのではなく、その発言の妥当性を歴史的資料に則して検証していきながら読んでゆく必要がある。出版後の反響の大きさゆえに、ヴァチカンを巻き込んで、さまざまな立場の識者からさまざまな著書が出版される状況が生まれており、さながら現代の異端審問会議の様相を呈し始めている。この小説が提起した今日の問題点を考察してゆきたい。

1. code

この小説の主要なテーマとなっている〈コード(暗号)〉は小説冒頭の描写から始まって、最終章まで貫流している。世界はコード化されていると考え方は、表面に見える現象の背後に真の原理が暗在すると考える思考形態である。

これは、自然界の仕組みの解明を目指そうとする真理探究の原動力にもなり得るものである。現代でも生命科学の〈生命の暗号〉、物質の究極

的構造を解明しようとする〈超ヒモ理論〉、銀河誕生の謎を解明しようとする〈巨大ブラック・ホール理論〉などあらゆる学問研究の基礎となっている。

『ダ・ヴィンチ・コード』における最も重要なコードは、ダ・ヴィンチが描いた『最後の晩餐』には表立って口にすることができない秘密情報が暗号化されている、というものである。小説最大のこのコードを際立たせるための布石として、

作者は分かりやすいコードから紹介し始める。それが各種の anagrams であり、Fibonacci sequence であり、golden ratio であり pentacle である。これらの暗号は小説の主要テーマと直接の関連は薄い、意外性を秘めており読者を小説世界に引き込むために効果的である。

1-1 Golden ratio (黄金比)ⁱ

黄金比とは、長さが $1 : (1 + \sqrt{5}) / 2$ になることで、正五角形の一辺と対角線の比が黄金比である。さらに、五芒星の中にもこの黄金比がたくさん隠れている。しかし、黄金比について語られるようになるのはピタゴラスから約 200 数年後のユークリッドに拠る。ピタゴラスは黄金比については何も言っていないとのことである。

完璧な人体プロポーションを表していると言われるミロのビーナスのつま先からへそまでと、つま先から頭のとっぺんまでの比が黄金比となっている。「黄金比」は、パルテノン神殿やミラノ大聖堂、ミロのビーナスなど多くの建築物、彫刻、絵画などに見られる。その他に、ひまわりの種の数(右回りと左回り)、蜂の巣の中のオス蜂とメス蜂の数の比、オウム貝の対数螺旋など自然界に多く存在している。現代では、新書版名刺、パスポート、コミックマンガ本、テレホンカードなど、縦・横の比は黄金長方形である。

自然界の中におびただしく観察される黄金比はラングドンによって「秘められた秩序」(an underlying order) として、世界を構築している暗号の具体例として提示されている。

My friends, as you can see, the chaos of the world has an underlying order. When the ancients discovered PHI, they were certain they had stumbled across God's building block for the world, and they worshipped Nature because of that. (DC 102)ⁱⁱ

(皆さんご存知のように、混沌状態に思える世界の背後には見えざる秩序が存在します。古代人が PHI を発見したときに、世界創造の建築資材を

偶然見つけたと考えて、それ故に自然を崇めたのです。)

1-2 Fibonacci Sequence と Anagram

小説の冒頭で、何者かによって殺害されたルーブル美術館の館長ソニエールは、ルーブル美術館の寄せ木張りの床に一連のコードを残している。

13-3-2-21-1-1-8-5

O, Draconian devil!

Oh, lame saint!

ラングドンの解釈によれば、一行目の数列は 2 ~ 3 行の文字列を解く鍵だという。一行目の数列は順序を入れ替えることにより Fibonacci Sequenceⁱⁱⁱ であることを突き止める。同じ方法で文字列を入れ替えると意味のある言葉となる。^{iv} アナグラムである。

1-1-2-3-5-8-13-21

Leonardo da Vinci!

The Mona Lisa!

意味のある言葉に並び換えられたものの、この段階では、その言葉が何を伝えようとしているのかはわからない。

アナグラムは現代ではつづり換えゲームになっているが、古代においては神聖な象徴行為であった。^v この小説の中には数多くのアナグラムが使われており、それを解いてゆく過程が小説のプロット展開を作り上げている。

モナ・リザの防護ガラスの上にソニエール館長が書き残した文字、'SO DARK THE CON OF MAN' は 'Madonna of the Rocks' のアナグラムである。(DC 133) この絵の通称は *The Virgin of the Rocks* が正式名称で、'Madonna of the Rocks' は 'So dark the con of Man' のアナグラムを作るために作者ダン・ブラウンが便宜的に付けた名称である。

この絵には原作と修正作の二枚が存在する。

原作はルーブル美術館に、修正作はナショナル・ギャラリーに展示されている。また、原作において処女マリアはその右手を彼女の右手の赤ん坊の肩においている。その赤ん坊がイエスだとしている。これはイエスとヨハネの配置の通常理解を逆転している点で、興味深い。

The painting showed a blue-robed Virgin Mary sitting with her arm around an infant child, presumably Baby Jesus. Opposite Mary sat Uriel, also with an infant, presumably baby John the Baptist. Oddly, though, rather than the usual Jesus-blessing-John scenario, it was baby John who was blessing Jesus. (DC 148)

1-3 モナ・リザ・コード

作者ダン・ブラウンはラングドンの口を借りてその謎を別様に解き明かそうと試みる。モナ・リザが世界でもっとも有名な絵画となっている理由は、「謎の微笑み」(enigmatic smile) などによるものではない。それは単にダ・ヴィンチ自身が、モナ・リザは最高の傑作だと言ったためである、とする。

しかし多くの美術史家はその芸術的な完成度がそれほど高度のものではないことをいぶかしく思ってきた。この絵は、ありきたりのほかし絵に過ぎないというのである。ダ・ヴィンチが旅先まで持ち歩き、終生手放すことがなかったほどの強い執着心の謎の原因はもっと深いものがあり、絵の具の重ね塗りの下に隠された、「秘密のメッセージ」(hidden message) があるという。「モナ・リザ」の呼称の由来ははっきりしてはいないが、通常「リザ夫人」と考えられている。

Mona Lisa < AMON L'ISA

ダン・ブラウンは、「モナ・リザ」は「アモン・リザ」のアナグラムだと解く。アモンは古代エジプトのテーベの市神であり、中王国以来の最高神である。新王国では太陽神ラーと同一視された。

彼はまた、「豊穡の男神」(God of masculine fertility, DC 129) であった。アモンと共に居る豊穡の女神はイシスであるが、古代の絵文字で Isis は L'isa と書かれた、と説明する。

男神 Amon と女神 L'isa の両神が合体した Mona Liza の名が示すように、モナ・リザは男性でも女性でもなく、両性が融合した androgyny だと考える。男神と女神との間の優劣が消失し、両者のバランスのある融合状態が暗示される。

"Whatever Da Vinci was up to," Langdon said, "his Mona Lisa is neither male nor female. It carries a subtle message of androgyny. It is a fusing of both." (DC 129)

1-4 『最後の晩餐』のコード

最も重要な謎は、聖杯の謎である。一般的に聖杯は十字架に磔にされたキリストの身体から流れ出す血を受け止めた杯とされるが、この小説において聖杯は、象徴的にキリストの血脈を受け継いだ女性、すなわちマグダラのマリアと解釈されている。

『最後の晩餐』に描かれた13人の人物の中で、イエスの右側に座る人物は注意して見れば女性だという。眠っているかのように体を傾げて長い髪を肩にたらしめているこの人物は、繊細な両手を組んでテーブルの前に置いて、男性とは思えない華奢な上体とともに、ふっくらとした胸部が描かれている。この人物の衣服はイエスとは対照的に青のローブと赤のクロークであり、二人の関係は、他の人物とは格段に異なる親密さを印象付ける。イエスとこの謎の人物が作り上げている輪郭はアルファベットの M であり、ソフィーが考えるように、*Mary Magdalene*、*Matrimonio*、などの頭文字を読み込むことができないことはない。

Langdon smiled. "As it turns out, the Holy Grail does indeed make an appearance in *The Last Supper*. Leonardo included her

prominently."

"Hold on," Sophie said. "You told me the Holy Grail is a woman. The Last Supper is a painting of thirteen men."

"Is it?" Teabing arched his eyebrows. "Take a close look."

Uncertain, Sophie made her way closer to the painting scanning the thirteen figures— Jesus Christ in the middle, six disciples on His left, and six on His right.

"They're all men," she confirmed.

"Oh?" Teabing said. "How about the one seated in the place of honor, at the right hand of the Lord?"

Sophie examined the figure to Jesus' immediate right, focusing in. As she studied the person's face and body, a wave of astonishment rose within her. The individual had flowing red hair, delicate folded hands, and the hint of a bosom. It was, without a doubt . . . female. (DC 262)

これまでイエスの右に座する人物はバプテスマのヨハネと解釈されてきた。ルネッサンス期においてヨハネは伝統的に女性的に描かれていた。事実ダ・ヴィンチの作と考えられている 'Saint John the Baptist' は流れるような赤毛の巻き毛をしており、右側に頭を傾げかすかな微笑を浮かべている。^{vi}

確かに『最後の晩餐』は謎めいた絵である。ヨハネ（マリア）の人物描写のみならず、ペテロと目される人物の描写は特異な仕草をしている。ペテロの左手はヨハネ（マリア）の首の前に描かれていて、手形で空手チョップを入れるかのようであり、右手に持つナイフは刃を上にして、物騒な印象を与えている。ペテロのナイフは dagger ではなく breadknife だとする見解もある。しかし、切り分けなければならないようなパン塊はなく、ナイフを手にして跳びかからんとするかのようなペテロの姿勢は異様なものである。

会食をする人々の中から、裏切るものが出るとイエスが告知をする場面であるならば、驚愕する人々の中でなぜ独りヨハネ（マリア）は眠るがごとく目を閉じているのかという疑問も浮かんでくる。

ペテロの異様な姿は、自分たちよりも深く愛されているマリアへの嫉妬心があるからで、マリアの抹殺をたくらむ姿をダ・ヴィンチが密かに描いているのだと、ダン・ブラウンは解釈する。

その根拠として用いられているのが、ナグ・ハマディー文書である。

1-5 マグダラのマリア

ナグ・ハマディー文書の中の 'the Gospel of Philip' には、イエスがマリアと親しく交わり、しきりに口付けをし、弟子たちは不満の声をあげたと記載されているという。

And the companion of the Savior is Mary Magdalene. Christ love her more than all the disciples and used to kiss her often on her mouth. The rest of the disciples were offended by it and expressed disapproval. They said to him, 'Why do you love her more than all of us?' (DC 73)

人間イエスを想定した場合、異性を愛することは何ら問題が無いが、神の子キリストを想定するときにはあまりにも人間的過ぎる側面であるがゆえにこの種の資料は抹消されていったという。しかし、偶然に抹消をまぬかれた文書が時折発見されるという。

ダン・ブラウンはナグ・ハマディー文書の中からもうひとつの文書 'the Gospel of Mary Magdalene' を引用している。

And Peter said, 'Did the Saviour really speak with a woman without our knowledge? Are we to turn about and all listen to her? Did he prefer her to us?'

And Levi answered, 'Peter, you have always been hot-tempered. Now I see you contending against the woman like an adversary. If the Saviour mad her worthy, who are you indeed to reject her? Surely the Saviour knows her very well. That is why he loved her more than us.' (DC 268)

作者ダン・ブラウンはここで、イエスが弟子（ペテロ）たちよりもマリアを重視していたこと、そしてペテロがそのことに不満を抱いていたことを指摘しようとしている。ダン・ブラウンはさらにティーピングの口を借りて、イエスは自分の教えを伝えるべき本来の後継者をペテロではなく、マリアに想定していたと述べさせている。

"According to these unaltered gospels, it was not Peter to whom Christ gave directions with which to establish the Christian Church. It was Mary Magdalene."

Sophie looked at him. "You're saying the Christian Church was to be carried on by a woman?"

"That was the plan. Jesus was the original feminist. He intended for the future of His Church to be in the hands of Mary Magdalene."

"And Peter had a problem with that," Langdon said, pointing to *The Last Supper*.

"That's Peter there. You can see that Da Vinci was aware of how Peter felt about Mary Magdalene."

Again, Sophie was speechless. In the painting, Peter was leaning menacingly toward Mary Magdalene and slicing his blade-like hand across her neck. The same threatening gesture as in *Madonna of the Rocks!* ^{vii} (DC 268-269)

キリストの教えを自分が引継ぎ、教会を建設しようと考えていたペテロにとってこれは不都合なことであり、マリアを社会的に抹殺する必要が

あったとし、その結果マリアは、娼婦の烙印を押されることになったのだというのである。この見解は作中人物を通じた、作者自身の見解と考えられる。

マグダラのマリアが娼婦であるとする見解は、紀元 591 年に法王グレゴリー一世によって宣言されたカトリック教会の公式見解である。ルカ伝 7 章 37 節 38 節の記述を元にした推測であった。1378 年後の紀元 1969 年にローマ教皇庁は、それが誤りであることを公式に認めた。^{viii}

マグダラのマリアを娼婦とする見解はコンスタンティヌス大帝と 325 年のニカエア公会議に原因があるかのように小説を展開するダン・ブラウンは、この見解が神聖女性を悪霊化する運動の先駆けであったとする。

2 ティーピングが語るキリスト教成立過程

作者ダン・ブラウンは作中人物であるティーピングの口を借りて、キリスト教成立過程のいきさつを語る。かれはイエスを歴史上の人物として位置付けようとする。以下に、その内容をまとめてゆく。

第 55 章でティーピングは、「聖書は人間が生み出したもので、神が造り給うたものではない」と語る。「聖書は、騒然とした時代の歴史記録であり、数知れない翻訳と加筆、修正によって進化しているものだ」と断言する。

"The Bible is a product of man, my dear. Not of God. The Bible did not fall magically from the clouds. Man created it as a historical record of tumultuous times, and it has evolved through countless translations, additions, and revisions. History has never had a definitive version of the book." (DC 250)

そしてキリストは歴史上最も深い謎と靈感能力を有した指導者であり、信じがたいほどの影響力を有した人物であったと位置付けられている。

"Jesus Christ was a historical figure of

staggering influence, perhaps the most enigmatic and inspirational leader the world has ever seen." (DC 251)

ソロモン王とダビデ王の子孫として、イエスはユダヤ民族の王の玉座を受けるべき正統な血脈を有していた。当然のことながら、イエスの生涯はその王国の何千もの信徒によって記録されていた。

"As a descendant of the lines of King Solomon and King David, Jesus possessed a rightful claim to the throne of the King of the Jews. Understandably, His life was recorded by thousands of followers across the land." (DC 251)

新約聖書を編纂するときに 80 を超える福音書が対象になっていたが、実際に所収されたものは、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書であった。

"More than eighty gospels were considered for the New Testament, and yet only a relative few were chosen for inclusion-Matthew, Mark, Luke, and John among them." (DC 251)

今日我々が知る限りにおいて、聖書は異教徒であったローマ皇帝コンスタンティヌス大帝によって校合された。^{ix}

"The Bible, as we know it today, was collated by the pagan Roman emperor Constantine the Great." (DC 251)

コンスタンティヌス大帝の時代にローマの公式の宗教はソル・インヴィクタス、すなわち太陽崇拝であった。そして、コンスタンティヌス大帝はその異教の首席司祭であった。

In Constantine's days, Rome's official religion

was sun worship-the cult of *Sol Invictus*, or the Invincible Sun-and Constantine was its head priest. (DC 251)

イエスが架刑に処せられた後おおよそ 300 年後に、キリストの信徒は急激に増加した。キリスト教徒と異教徒との間に戦いが始まり、ローマ帝国を二分するほどに熾烈なものとなった。コンスタンティヌス大帝は何らかの手を打たなければならぬと考えた。紀元 325 年にコンスタンティヌス大帝はローマ帝国を一つの宗教の下に統一しようと考えた。キリスト教が選ばれた。

Three centuries after the crucifixion of Jesus Christ, Christ's followers had multiplied exponentially. Christians and pagans began warring, and the conflict grew to such proportions that it threatened to rend Rome in two. Constantine decided something had to be done. In 325 A.D., he decided to unify Rome under a single religion. Christianity. (DC 251)

コンスタンティヌス大帝はキリスト教が優勢と見るや、勝ち馬に味方したのである。彼は見事な手腕を発揮して、太陽崇拝の異教徒をキリスト教徒に改宗させた。異教のシンボル、日取、祭儀などをキリスト教に取り入れ、両陣営に受け入れ可能な混交宗教 (hybrid religion) を創造した。

"By fusing pagan symbols, dates and rituals into the growing Christian tradition, he created a kind of hybrid religion that was acceptable to both parties." (DC 252)

キリスト教の象徴学における異教的痕跡は否定しがたい。エジプトの神々の日輪は、カトリックの聖者の光輪となった。奇跡的に懐妊・出産したホーラスに授乳するイシスの絵画は、幼子イエスを育む処女マリアの近代的イメージを生み出す源となった。法冠、祭壇、頌栄、聖体拝領などカ

トリックのほとんどすべての祭儀はそれに先立つ異教的な神秘宗教に基づいている。

"The vestiges of pagan religion in Christian symbology are undeniable. Egyptian sun disks became the halos of Catholic saints. Pictograms of Isis nursing her miraculously conceived son Horus became the blueprint for our modern images of the Virgin Mary nursing Baby Jesus. And virtually all the elements of the Catholic ritual—the miter, the altar, the doxology, and communion, the act of 'God-eating'—were taken directly from earlier pagan mystery religions." (DC 252)

キリスト教は先行宗教の行事を引き継いでいる。キリスト教に先立つミトラス教^xの神は12月25日に誕生し、死んだ後に岩の墓に埋葬されて三日後に甦った。ついでながら、オシリス、アドニス、ディオニソスの誕生日はみな12月25日である。生まれたばかりのクリシュナには、金、乳香、没薬が贈られた。週ごとに安息日を置く習慣もその起源は異教的なものである。

"Nothing in Christianity is original. The pre-Christian God Mithras—called *the Son of God* and *the Light of the World*—was born on December 25, died, was buried in a rock tomb, and then resurrected in three days. By the way, December 25 is also the birthday of Osiris, Adonis, and Dionysus. The newborn Krishna was presented with gold, frankincense, and myrrh. Even Christianity's weekly holy day was stolen from the pagans." (DC 252)

ラングドンは言った。「キリスト教徒は土曜日に行われていたユダヤ教の安息日を守ってきたが、コンスタンティヌス大帝はその曜日を変えて異教徒の太陽崇拝の日と一致させた。今日に至るまで教会出席者は日曜日の朝礼拝に出席する

が、その日 (Sunday: 太陽の日) が異教の太陽神への週毎の奉仕であることを知る者は少ない」。

Langdon said, "Christianity honored the Jewish Sabbath of Saturday, but Constantine shifted it to coincide with the pagan's veneration day of the sun." He paused grinning. "To this day, most churchgoers attend services on Sunday morning with no idea that they are there on account of the pagan sun god's weekly tribute—Sunday." (DC 252)

かつてソフィーは、ニカイア公会議はニカイア信条が承認された会議として聞いたことがあった。^{xi} ティービングは言った。「この会議で、キリスト教の諸問題が話し合われて、イースターの日取、司祭の役割、聖餐式の式次第、イエスの神性について評決された」。

Sophie had heard of it (the Council of Nicaea) only insofar as its being the birthplace of the Nicene Creed.

"At this gathering," Teabing said, "many aspects of Christianity were debated and voted upon—the date of Easter, the role of the bishops, the administration of sacraments, and, of course, the divinity of Jesus." (DC 252)

ティービングは言った。「イエスが<神の子>として制定されたのは、ニカイア公会議に公式に提案され、評決された結果である」。

「ちょっと待って。イエスの神性は評決の結果だとおっしゃりたいの」。

「しかも、僅差の評決だった」。ティービングは付け加えた。

「にもかかわらずキリストの神性を確立することは、ローマ帝国の統一を一段と強固なものにし、ヴァチカンの権力基盤を確立するために不可欠であった。

Teabing said. "Jesus' establishment as 'the Son of God' was officially proposed and voted on by the Council of Nicaea."

"Hold on. You're saying Jesus' divinity was the result of a vote?"

"A relatively close vote at that," Teabing added.

"Nonetheless, establishing Christ's divinity was critical to the further unification of the Roman empire and to the new Vatican power base." (DC 253)

以上、小説『ダ・ヴィンチ・コード』で語られているキリスト教成立過程についての要点をまとめた。イエスを歴史上の人物として (Jesus Christ was a historical figure 250)、そして聖書を歴史的記録として (Man created it as a historical record of tumultuous times 250) 捉えるときには、このような理解がなされること具体例として興味深い。

3 男女の調和 (male and female harmony)

『ダ・ヴィンチ・コード』の主題のひとつに神聖女性の復権のテーマが明らかである。主要人物としてソフィーを配置していること、および黄金比と関連付けられたその名前の由来、マリアの復権までのいきさつ、小説の最終部に描かれるマリアへの祈り、などが描写される。

これはキリスト教主導の西洋の歴史の中で、不当に貶められてきた女性および女性原理の復権を目指すものであり、ダ・ヴィンチのメッセージでもあるという。

The circle had been the missing critical element. A feminine symbol of protection, the circle around the naked man's body completed Da Vinci's intended message-male and female harmony. (DC 49)

3-1 イーヴの創造

キリスト教において女性蔑視の傾向が生まれ

た根拠には、女性がいかに創造されたのか、その方法に原因があるとする見方がある。聖書では、イーヴの創造は二通りに語られている。神はイーヴをアダムの脇腹から創造され給うたとする記述 (創世記 2.21)、および神は自らの姿に似せて男と女を創造され給うたとする記述 (創世記 1.26 - 27) がある。

前者のアダムの脇腹からの創造説に従えば、イーヴはアダムに従属する存在とされる。グノーシス派は、後者の記述を根拠にして、神が男性と女性の両性の属性を有するものと理解して、男女が平等の立場に置かれるべきものと考えた。

伝統的なイーヴのイメージは、蛇に姿を変えた墮天使セタンに唆されて、戒めの智恵の木の実を食べて墮ちた女であり、そのうえにアダムまでも墮落させた女だとするものである。このような女性の原型的イメージが女性蔑視の先入観を植え付ける可能性は捨てきれない。カルタゴ生まれの初期キリスト教神学者のテルトゥリアヌス (Quintus Septimius Florens Tertullianus) (160?-230) は、キリスト教徒の女性宛に次のように書いている。

You are the devil's gateway You are she who persuaded him whom the devil did not dare attack.... Do you know that you are each an Eve? The sentence of God on your sex lives on in this age; the guilt, necessarily, lives on too. (De Cultu Feminarum I. 12) (SC 127)^{xii}

(あなた方女性は、悪魔への入り口である。あなた方は悪魔が敢えて攻撃し得なかった者[すなわちアダム]を説き伏せた者である。あなた方は、一人一人がイーヴであることを知っているのか。女に対して下し給うた神の宣告は今もなお生きている。当然のことながら、その罪も生き続けている。)

このような見解は、聖書を歴史書と見なして、そこから教訓を得ようとする立場から生み出さ

れている。

蛇とイーヴについての正統的な見解は、墮天使セイタンがセルバンに身を糞し、まずイーヴを誘惑して神によって戒められた智恵の木の実を食べさせて墮落させた。墮落したイーヴはアダムをも引き込んで墮落させ、共に樂園を追放させられる結果を招いた、というものである。

ところが、ナグ・ハマディー文書に含まれる『真実の証』(Testimony of Truth)において、蛇は樂園の中で最も賢い生物とされている。そして、人がより高い知へと目覚めることをねたむ神とはどのような神なのかと創造主への疑問を投げかけている。

'The Hypostasis of the Archons'によれば、イーヴも蛇も聖なるソフィアによって鼓舞されたものであり、ソフィアはその知を蛇に伝え、蛇がアダムとイーヴの真の源泉を伝えたとされている。

グノーシス派の聖典の多くには、イーヴは女神ソフィアの娘であり、その使者であるとされている。イーヴはソフィアの使者としてまた導者としてアダムを深い眠りから起したとされている。テルトゥリアヌスなどの初期キリスト教神学者の立場とは異なり、グノーシス派の人々は、男性はその命と意識を与えた女性に大きく依存していると考えた。

3-2 グノーシス (Gnosis) の意味

グノーシス派の人々は宗教的に徹底した霊肉二元論に立ち天上界あるいはアイオン界における最高神と、アイオンの一つが墮落してできた地上界の造物者デミウルゴスすなわち旧約の神とを峻別する。この神は世界を創造したが、万物の不完全さを免れることはできず、また自らに背くものを怒り呪う神である。^{xiii}

グノーシスとは、「知識」、「洞察力」、「智恵」などの意味を表すギリシャ語である。「靈知」または「覚知」の訳語が用いられることがある。グノーシスは特定の学問分野の知的な知識と対照的に、神によって鼓舞される直感的で内的な知識とされる。知覚体験として得られるグノーシス

の内包は、神との合一を追求する霊的訓練の究極の目標とされ、個人的な黙示とされる。今日のグノーシス派の一分派にとってグノーシスを得る一つの方法は、hieros gamos (聖なる結婚)の祭儀によるものとされる。

グノーシス派の人々は、一部の初期キリスト教徒と同様に旧約の神に困惑した。初期キリスト教世界の知的階級の人々の中には、高度の知的・霊的素養を備えた人々がいた。プラトン、フィロン^{xiv}、プロティノス^{xv}、などの教説に精通していたこのような人々は、復讐心、激怒、嫉妬心、外人嫌い、権柄尽な主張、をあらわにする旧約の神の位置付けに窮した。

グノーシスとは、ギリシャ語で「知識」の意味であり、その「知」とは、この世になぜ悪が入り込んできたかを説明する「知」であり、また人はいかにしてその悪から自らを救い出すことができるかを語る「知」である。いくつかに分派したグノーシス派の中で、紀元140年ころにアレクサンドリアとローマでもっとも有力であったValentinusは、この世がいかにして創造されて、悪がこの世に如何にして忍び入ったかについて真の「知」を有すると述べた。彼は神聖な調和の中心に座したもう主神(a primal God)が自らの顕現として男女のペアを生み出したと考えた。^{xvi}

3-3 hieros gamos (聖なる結婚)の祭儀

ソフィーはヒエロス・ガモスの儀式を偶然目撃し、祖父との関係を絶つ。ラングドンは、ヒエロス・ガモスの本来の意義について説明し始める。以下にその要点をまとめる。

それは二千年以上もさかのぼる儀式で、女性の生殖能力を祝うためにエジプトの司祭と巫女の間で定期的に執り行われてきた。

Langdon had read descriptions of this ceremony and understood its mystic roots. "It's called Hieros Gamos," he said softly. "It dates back more than two thousand years. Egyptian priests and priestesses performed it regularly to

celebrate the reproductive power of the female."
(DC 334)

それは霊的な行為であった。歴史的に肉体の交わりは男女ともに接神体験をもたらす行為であった。男性は神聖女性を知るまでは不完全な状態にあると古代人は信じていた。

Hieros Gamos had nothing to do with eroticism. It was a spiritual act. Historically, intercourse was the act through which male and female experienced God. The ancients believed that the male was spiritually incomplete until he had carnal knowledge of the sacred feminine.
(DC 335)

古代の人々が考えていた<性>は現代人が考えているものとは正反対のものであった。<性>によって新しい生命が誕生することは奇跡と考えられたが、この奇跡は神の御業によるものである。この出産能力のゆえに女性は、神と崇められた。男女の交わりは人間の魂の片割れ同士の合一を意味するもので、その行為によって男性は霊的に完全なものとなり、神と霊的な交わりが可能になった。

"Sophie," Langdon said quietly, "It's important to remember that the ancients' view of sex was entirely opposite from ours today. Sex begot new life-the ultimate miracle-and miracles could be performed only by a god. The ability of the woman to produce life from her womb made her sacred. A god. Intercourse was the revered union of the two halves of the human spirit-male and female-through which the male could find spiritual wholeness and communion with God. What you saw was not about sex, it was about spirituality. The Hieros Gamos ritual is not a perversion. It's a deeply sacrosanct ceremony."
(DC 335)

古代豊穡神信仰に根ざすヒエロス・ガモスの精神的な意義がどのようなものであれ、それが現実においては容易に異教的なヘドニズムに変化する。これはやがて悪魔崇拜や、黒ミサと結びついて地下に潜ることになった。

快樂と生殖のための存在意義しか認められていなかった異教的ヘドニズムとは一線を画して、女性が社会的に認められるきっかけとなったのは、意外なことに聖書の次の一説である。エペソ書第5章の31,33節には、人が父と母から独立して妻と一体となるべきであることを薦めている。

For this reason a man shall leave his father and his mother and shall be joined to his wife, and the two shall become one flesh. [Ephesians 5-31]

However, let each man of you (without exception) love his wife as [being in a sense] his very own self; and let the wife see that she respects and reverences her husband—that she novices him, regards him, honors him, prefers him, venerates and esteems him; and that she defers to him, praises him, and loves and admires him exceedingly. [Ephesians 5-33]

3-4 結婚制度の確立

ティーピング (ダン・ブラウン) はヒエロス・ガモスの意義を精神的な男女の結合として称揚し、男性優位のキリスト教を批判するのであるが、結婚制度により女性の地位を確立したのは、他ならぬキリスト教であることを雄弁に唱える文人がいる。キリスト教に批判的であったとされるロレンスの言い分に耳を傾けてみよう。彼には歴史の中で埋没してゆく本来のキリストの教えを取り戻そうとする発言が残されている。

Then I realize that marriage, or something like it, is essential, and that the Old Church knew best the enduring needs of man, beyond the spasmodic needs of today and yesterday. The

Church established marriage for life, for the fulfillment of the soul's living life, not postponing it till the after-death. (PII 503)^{xvii}

(古代の教会は知っていた。目先の発作的な欲求ではなく、人の長期的な欲求が何であるかを知っていた。魂の死後の救済のためではなく、魂が生き抜いて自己実現するために教会は結婚制度を確立した。)

普段に観察されることであるが、結婚は肉体的な合一とともに魂を成就させるものとして捉えられている。

And the Church created marriage by making it a sacrament^{xviii}, a sacrament of man and woman united in the sex communion, and never to be separated, except by death. And even when separated by death, still not freed from the marriage. Marriage, as far as the individual went, eternal. Marriage, making one complete body out of two incomplete ones, and providing for the complex development of the man's soul and the woman's soul in unison, throughout a life-time. Marriage sacred and inviolable, the great way of earthly fulfillment for man and woman, in unison, under the spiritual rule of the Church.

This is Christianity's great contribution to the life of man, and it is only too easily overlooked.

(PII 502-503)

(教会は婚姻を秘跡とすることにより、結婚制度を確立した。性的な交わりのなかで男女が合一する秘跡であって、死を受け入れるとき以外はどのようなことがあっても分け離すことができない合一の秘跡である。死によって男女が分け隔てられたときでも、婚姻から解放されることは無い。個人の関係において、結婚は永遠なのである。二つの不完全な肉体からひとつの完全なる肉体を創り、ともにいるなかで男女の魂の複雑な発展

を生涯に渡って生み出してゆく結婚。教会の霊的支配のもとで地上的な自己実現に至る最大の道である神聖にして侵すべからざる結婚。

(これは人類の生活に対してなし得たキリスト教の最大の貢献であるのだが、しばしば見落とされている。)

結婚の奥義についてこれほど簡潔かつ雄弁に語られている文章は他には無い。離婚が社会問題ではなくて社会現象となっている現代においてこの指摘は、神に誓う結婚の奥義を伝えている。教会の見解に盲目的に追従するのではなくて、歴史の中で歪曲されているイエスの本来の教えを探求しようとするロレンスは本来のキリスト者といえるのではないだろうか。ダン・ブラウンにも一脈相通じるものがあるように思われる。

女性原理の復権を願うダン・ブラウンは、止むこと無く戦禍が続く現代世界の根源に男性原理一色に染められた専制主義を感じ取っている。

Prior to 2000 years ago, we lived in a world of gods and goddesses. Today we live in a world solely of gods. Women in most cultures have been stripped of their spiritual power. And our male dominated philosophies of absolutism have a long history of violence and bloodshed, which continues to this day.^{xix}

男女神のバランスの取れた関係がどのようなものであり、具体的にどのような世の中を作り出すことができるのかは、不明である。

『ダ・ヴィンチ・コード』の最終部には、ラングドンがマリアの魂に祈りを捧げる、鎮魂のシーンが描かれている。長い間汚名を着せられて来たマグダラのマリアへの鎮魂の祈りである。

女性原理を復権することによって生み出されるかもしれない文明パラダイム改変への幽かな期待を託す祈りと理解することができる。

まとめ

この小説の主要なテーマは暗号であり、人間の世界は暗号化された意味に溢れているとする考え方である。そのテーマの傍証例として自然界を構成する基本原理としての黄金比やフィボナッチ数列が言及されている。数々の暗号の中でもっとも重大な暗号は宗教的な暗号であり、キリストが人の子であり、マグダラのマリアと結婚して、子孫を残したとするものである。この暗号は、『最後の晩餐』に暗示されているという。マリアの復権、すなわち神聖女性の復権が最大のテーマとして結論的に引き出される。

この小説はイエスを歴史上の人間として捉えているので、イエスを神の子と考える宗教界からは疑問視される点が少なくない。にもかかわらず、この小説に対する世界的な関心は高く、ベストセラーズの一 corner を長く保ち続けている。教材として扱ってほしいという学生からの要望が届いた。原文で読んでみたいというのである。大学での教材として扱う場合慎重な扱いが必要となる。平成17年度の夏の集中講義でこの小説を取り上げたときに、冷静にかつ批判的にこの小説を理解しようとする解説書とともに、読んで行った。本稿はその集中講義に向けてまとめた資料に基づいた小論である。この小説の英語は平明で、説得力がある。英語表現方法として参考になる。内容的には、西洋美術史、キリスト教史、異教との関係、神聖女性の復権、などを扱っていて、文化史全般への興味を掻き立てる。日ごろ平易な英文と平易な内容の英語に限られた授業を受けている学生にとって、新鮮な知的興味を植え付けることができたのではないかと考えている。

【文末脚注】

- i 拙著参照のこと。林 正雄、「BBC 教養番組の教材化—く人類限りなき挑戦(Explorations)の利用方法—」、静岡大学教育学部研究報告、教科教育学篇第36号、平成18年3月(2005年度)
- ii Dan Brown, *The Da Vinci Code* (New York: Doubleday, a division of Random House, Inc.) p. 102. 以下同じ。
- iii Fibonacci Sequenceとは、初項と第2項を1とし、第3項以後次々に前2項の和をとって得られる数列のことである。この無限数列は $(\sqrt{5} + 1) / 2$ に収束する。この極限值は、黄金比(黄金分割の比)として、古来、重要視された数である。
- iv "The numbers are a hint as to how to decipher the rest of the message. He wrote the sequence out of order to tell us to apply the same concept to the text." (DC 105)
- v Few people realized that anagrams, despite being a trite modern amusement, had a rich history of sacred symbolism. (DC 105)
- vi Michael Haag and Veronica Haag, *The Rough Guide to The Da Vinci Code*, p.128.
- vii 「誰のものでもない短剣を持った手」とあるが、これは現在ペテロの右手と解釈されている。
- viii Michael Haag and Veronica Haag, *The Rough Guide to The Da Vinci Code*, p.62.
- ix コンスタンティヌス大帝について石原は、次のように推測している。
何れにしてもコンスタンティヌスの施策は、初め帝国統一の目的のためにキリスト教を寛容してその支持を求めながら、従来の異教的崇拜を存続し、新ローマへの遷都を頂点としてキリスト教主義を強めたが、たとえば太陽神崇拜などは後に至るまで許容し、これと関連して新都に聖ソフィア教会堂と共に Tyche の神殿をも認めたらしい。それにしてもキリスト教主義的政策は後になるに従って推進され、337年降臨祭の季節に(5月22日)ニコメディアにて病死したときにはその最後の床にて洗礼を受けた(ただしアレオス派の聖職者の手によってではあったが)。要するにコンスタンティヌスの政策は、その個人的信仰が問われるほどに、鮮明とは言われない。不徹底らしく見えるばかりに態度が曖昧であった。(Cf. 石原謙、『キリスト教の源流』、岩波書店、152頁)
- x Mithras
ミトラス神は2世紀から4世紀にかけて古代ローマで人気の高かった神である。Mithrasは、ペルシャからインドにかけて崇拝された中東の Mitra 神あるいは Mithra 神に由来する。Mithrasは本来ゾロアスター神 Ahura-Mazda に仕える下級神であった。
(Cf. Dan Burnstein (ed.), *Secrets of the Code*, (New York: CDS Books), pp. 348-349.
- xi ニカイア公会議は、小アジアのニカイア Nicaea (現イスタンブール)で開かれた二度のキリスト教会の総会議である。ニケーア公会議ともいう。
第1回は325年コンスタンティヌス一世(大帝)によって招集され、アリウス論争を処理するために開かれた。
アリウス主義(Arianism)は、古代のキリスト教異端説で、その主唱者アリウスにちなんでこう呼ばれる。ギリシア哲学の思弁に基づいて、神の唯一絶対性を強調した。したがってイエス・キリストを「神の子」と呼んでも、決して父なる神に等しい永遠者とは認めず、たとえ比類なく優れた位置を占めるとしても、やはり神によって無からつくられた被造物であるとする。これに対して、アタナシウスをはじめとする正統的三位(さんみ)一体論者は、ニカイア公会議(325)においてアリウス主義を排斥し、キリストが神と同一本質を有することを宣言した。そうでなければ、真の神の仲介者たりえないからである。
第2回は東西両教会が認めた最後(第7回)の公会議で、画像論争を決着させるため、787年

に開かれた。この会議で、キリストの画像だけでなく、マリア、天使、聖人の画像をも是認、画像を崇（あが）めるのは像を通してその原像を崇めるものとして画像礼拝が回復され、画像破壊論者は異端とみなされた。(Cf. 小学館大百科事典)

- xii Dan Burnstein (ed.), *Secrets of the Code*, (New York: CDS Books), p 127.
- xiii キリスト教大事典編集委員会、『キリスト教大事典』、教文館、昭和 38 年、342 頁。
- xiv Philo Judaeus (アレキサンドリアの) フィロン (c20 B.C.-A.D.c50): Alexandria の神学者・哲学者。
- xv プロティノス (205?-270?): エジプト生まれのローマの哲学者; 新プラトン主義 (Neoplatonism) の創始者。
- xvi *Rough Guide to the Da Vinci Code*, p. 72.
- xvii D.H. Lawrence, *Phoenix II* (London: William Heineman Ltd) p. 503.
- xviii カトリックでは「秘跡」 (= the seven sacraments) といい、洗礼・堅信・聖体・告解・終油・叙階・婚姻の 7 つ
- xix DVD メディア、『ダ・ヴィンチ・コードの謎』、コムソトック社刊。ダン・ブラウン自身のナレーションの音声英語。